

巻頭言

深山リンドウを探して

花岡正幸

信州医学雑誌の巻頭言は、大学や病院の幹部、あるいは新しく着任された教授が執筆するものと思っていた。今回、私が未だ書いてないことが発覚し、この話が回ってきたらしい。最近特段の変化もないので、巻頭言に似つかわしくないエッセイ風になってしまったことを、ご容赦願いたい。

深山^{みやま}リンドウは日本固有の高山植物で、草丈は5 cm～10 cmほど、中部地方から北海道までの高山帯の湿原などに自生する。毎年7月から9月にかけて、青紫色の鮮やかな花を数輪咲かせる。リンドウ科リンドウ属に分類され、長野県の県花リンドウとは親戚である。しかし、大型で花数の多いリンドウとは異なり、深山リンドウの小振りで可憐な姿は登山者の心を惹きつけてやまない。

「槍も穂高もたそがれて 紫けぶる雪の谷
お花畑に花の香におう 夜の山小舎灯がともる
恋しアルプス乙女の夢よ

昨日ザイルを肩にかけ きれいな若い旅人が
越えたあの尾根みどりにかすむ 深山リンドウの恋悲し
恋しアルプス乙女の夢よ」

これは、昭和30年代に北アルプス^{からさわ}潤沢で歌われていた「深山リンドウ」という曲であり、近年まで松本深志高校山岳部で部歌のように歌い継がれてきた。作者不詳とされていたが、最近になり原曲は西條八十作詞、古関裕而作曲の「美しきアルプス乙女」であることが分かった。この玲瓏たる詩と哀調を帯びた曲を聴くたびに、山への憧憬が湧いてくる。

徳本峠^{とくごう}

徳本峠は、松本市安曇の島々から上高地に至る古道の途中にある標高2,135 mの峠である。昭和8年に上高地までバスが入るようになるまでは、この道が上高地へ行く唯一のルートであった。徳本という名前は、一説によると江戸幕府第8代将軍徳川吉宗のお付きの医師であった徳本氏に由来するそうだ。彼は吉宗公が病に伏した時、この峠を訪れ薬草を集めて献じたということである。この峠が有名なのは、ここから眺められる穂高連峰の絶景に他ならない。日本の近代登山の発展・普及に貢献した数々の登山家が訪れ、その眺望を絶賛している。古くは“日本アルプス”の命名者ウィリアム・ゴーランド、“日本アルプス”を海外に紹介したウォルター・ウェストン、日本山岳会の創設者小島烏水、近年では“日本百名山”の深田久弥などであり、ウェストンは夕日に染まる穂高連峰の景観に感激の涙を流したという逸話が残っている。

私が信州大学時代に所属していたサークルが信濃路研究会であり、その最大のイベントが毎

年6月のウェストン祭に合わせて実施される徳本峠越えの記念山行であった。島々谷の源流に沿って続く登山道はとにかくアプローチが長く、峠まで7時間30分、峠から上高地までが2時間30分の道のりである。島々谷からタクシーだと1時間で着く上高地まで、10時間かけて歩くのである。壮大な無駄と思うかもしれないが、この山行からさまざまなことを教わった。苔むした樹林帯の登山道にいにしえの旅人へ思いをさせ、枯れることのない力水から勇気をもらい、突然開けた峠からの絶景に感動し、苦楽を共にした仲間との友情を深めた。この時の友とは今も交流が続いている。島々谷の途中にあった老朽化した岩魚留小屋は、どうなっているだろうか。徳本峠には逆コースも含めて都合6回登った。深山リンドウは見つからなかったけれど、効率優先の現代社会において、回り道も必要だよと教えてくれる気がする。

常念岳

堀金小学校の校長だった佐藤嘉市は、毎朝「常念を見よ」と児童生徒に呼び掛けたという。評論家の白井吉見が影響を受けたという人物だ。松本市から眺める常念岳の三角錐は実に見事であるが、安曇野の人たちに言わせると本物の姿ではないようだ。昔、常念岳の隣、横通岳よこどおしにロープウェイを架ける計画があったと聞く。実現していれば、北アルプス南部の登山環境は一変していたことだろう。自然保護云々の議論は抜きにして、岐阜県の観光戦略はしたたかに思う。新穂高ロープウェイにより西穂高岳が、乗鞍スカイラインにより乗鞍岳が、それぞれ“岐阜の山”になっている。

さて、本題の常念岳であるが、何回登ったか正確に数えることができない。学生時代は部活動やサークル活動で登り、大学卒業後しばらくは中学校集団登山の付き添いとして、そして最近では常念診療所のボランティアとして、幾度となく足を運んだ。診療所のある標高2,450mの常念乗越のつしもどこか徳本峠に似ていて、登り5時間のアルパイトののち、急に視界が開ける。晴れた日の槍・穂高連峰の大パノラマは筆舌に尽くし難い。常念小屋支配人の山崎さんは、この壮観を“巨人が寝ている”と中学生に教えている。常念診療所は、常念小屋の端の冬季小屋に夏季のみ設置される山岳診療所だ。信州大学医学部山岳部が運営しており、医師や看護師がボランティアで詰めている。健康保険が使えない自由診療を行っており、最低限の医薬品のみ揃えている。特に、今年は設立30周年の記念すべき年だ。常念診療所の活動を通してさまざまな経験をさせてもらったが、最も大きな財産は人との出会いであろう。他診療科の先生、研修医、看護師さん、山岳部学生、皆で力を合わせないと診療所の運営はできない。常念小屋のスタッフやアルパイトさんの協力も不可欠だ。自然と一体感が湧いてくる。夜遅くまで酒を酌み交わし、寝不足で下山する朝、いつの日かここで再会することを誓うのである。そして、おそらく一期一会となる患者さんとの出会いも貴重な体験だ。思うに、山岳診療所とは究極のプライマリーケアではないだろうか。信大病院の初期研修プログラムに組み込んでも良いと思う。

残念ながら、常念岳への登山道でも深山リンドウにお目にかかっている。一ノ沢の上部から胸突き八丁にかけお花畑が広がるが、一ノ沢登山道で最も辛い区間であるため、見落としていただけかもしれない。

冒頭で「深山リンドウは登山者の心を惹きつけてやまない」と書いたが、結局のところ、本物にお目にかかった記憶がない。だからこそ、これからも深山リンドウを探して山に行こうと思う。できるだけ散策を楽しみながら……。

(信州大学医学部内科学第一教室教授)